

# 『枕草子』に描かれた「萩」

崔賢珠\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 『枕草子』の「草の花は」の段の「萩」
  3. 対象の色彩にまず注意すること
  4. 視覚を中心にしていること
  5. おわりに
- 
- 

## 1. はじめに

萩は秋の七草の一つで、しだれた枝に白や紅紫色の數多の小花をつける植物である。この萩の花は、古代には染料にも用いられたので人々に親しまれていた。萩は万葉集に詠まれている花の中で最も數が多く一四一首に詠まれているし、万葉集に比べると歌の數は少ないが、古今集では十五首、後撰集に十二首、拾遺集には十六首に詠まれているなど、平安時代に入っても秋の代表的な景物として和歌に詠まれつづけてきた植物である。萩は歌に詠まれるだけではなしに、「我がやどに咲ける秋萩常ならば我が待つ人に見せましものを(万葉集・二一一六・詠み人知らず)」などがあるように、人々は自分の家の庭に萩を植えて楽しむこともした。平安中期の貴族の藤原保昌は、萩の名所の陸奥の宮城野をまねて自邸の庭に萩を植えたといひ、保昌と同時代の人で陸奥の守であった橘爲仲は、都へ宮城野の萩を持って歸り、それを見に多くの人が集まったという<sup>2)</sup>。また、和歌では萩は鹿・雁などの動物や、露・月・秋風などの天象

---

\* 武庫川女子大學大学院 日本語日本文學専攻 博士後期課程、日本古典文學

1) 『能因法師集』に次の歌がある。

津の守保昌の朝臣、六條の家に宮城野の萩を思ひやりつつ植えたるを見て  
宮城野を思ひ出でつつ移しけるもとあらの小萩花咲きにけり(一三〇)  
返し

宮城野を戀ふる宿には露かくることの葉さへぞあはれなりける(一三一)

2) 『無名抄』に次のような記事がある。

この爲仲、任果てて上りける時、宮城野の萩を掘りて、長櫃十二合に入れて持ち上りければ、人あまね

とともに詠まれることが多い。このように人々に愛された萩を、枕草子はどのように描いているか。本考では、枕草子に記されている萩を、万葉集や三代集などの和歌に詠まれている萩と比べて、その特徴を考えてみたいと思う。

## 2. 『枕草子』の「草の花は」の段の「萩」

枕草子では、萩を草花の代表的なものを上げた「草の花は」の段にとりあげて、次のように記している。少し長いが、「草の花は」の段にとりあげられている草花の記述上の共通点を知るために、その全文をあげる。<sup>3)</sup>

草の花は、撫子。唐のはさらなり。大和のもいとめでたし。女郎花、桔梗、朝顔、刈萱、菊、壺すみれ。<sup>(A)</sup>龍膽は、枝さしなどもむつかしけれど、異花<sup>ことほな</sup>どものみな霜枯れたるに、いと花やかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。

また、わざと取り立てて、人めかすべくもあらぬさまなれど、<sup>(B)</sup>かまつかの花、らうたげなり。名もうたてあなる。雁の來る花とぞ文字には書きたる。<sup>(C)</sup>かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかしきなり。<sup>(D)</sup>萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよなよとひろごり伏したる。さ牡鹿のわきて立ちならすらんも、心ことなり。八重山吹。

<sup>(E)</sup>夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、いひ續けたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、實の有様こそいとくち惜しけれ。など、さはた生ひ出でけん。<sup>(F)</sup>額づきなどいふもののやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりはをかし。しもつけの花。葦の花。

これに<sup>(F)</sup>薄を入れぬ、いみじうあやしと人いふめり。秋の野のおしなえたるをかしさは、薄こそあれ。穂先の蘇枋にいと濃きが、朝霧に濡れてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞいと見所なき。色々に亂れ咲きたりし花の、かたちもなく散りたるに、冬の末まで、かしらのいと白くおほどれたるも知らず、昔思ひ出で顔に、風になびきてかひろき立てる、人にこそいみじう似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそあはれと思ふべけれ。

(第六四段、「草の花は」)。

この段に挙げられている花のうち、「撫子・女郎花・朝顔・刈萱・菊」なども歌によく詠ま

---

く聞きて、京へ入りける日は、二條大路にこれを見物して人多く集りて、車などもあまた立てりけりとぞ。(大曾根章介・久保田淳『鴨長明全集』貴重本刊行會(二〇〇〇年)105ページ参照)

- 3) 以下、枕草子の本文と段数は、増田繁夫校注『枕草子』和泉書院(一九九五年)による。また、傍線や太字は論者による。

れた花である。「壺すみれ・八重山吹・しもつけの花・葦の花」などは、特に花の特徴などを記すことなく、花の名前だけをあげているので、これらの花がこの段にとりあげられた理由は明らかではない。けれども、龍胆・かまつかの花・かにひの花・萩・夕顔・薄などの花については、花の形や色、またはそれぞれの花のもつ特色をも記しているの、その記事を参考にして、「草の花は」の段の花のとりにあげ方の特徴を探ってみたいと思う。

(A)の龍胆については、龍胆は枝ぶりなどもむさくるしいが、他の花々がみな霜にあたって枯れてしまった中で、この花だけが濃い紫色をして、とても色鮮やかな色で顔をのぞかせているのがたいへん風情がある、と記している。作者は第八四段「めでたきもの」の段に「すべて何も何も、紫なる物はめでたくこそあれ。花も糸も紙も」と記しているが、龍胆は、他の花が咲き終わり葉が枯れてしまったなかで、特に濃い紫色の花が目立つところが美しく見えたに違いない。(B)のかまつかの花は、今の何の花か色々説があってわからない<sup>4)</sup>。作者も、花の形や色について詳しく説明していないが、花のかわいらしさと「雁の来る花」と書く漢字の表記が作者の興味をひいたことがわかる。(C)のかにひの花も今の何の花かわからないが<sup>5)</sup>、色は藤ほど濃くないけれど藤の花にとてもよく似て、春秋に咲くのが素晴らしいと記していることから、花の形や花期が作者の興味を惹いて挙げたものと考えられる。(E)の夕顔は、花の形も朝顔と似ていて、朝顔に並んであげる、とても趣のある花なのに、實の恰好ときたら實に残念である。どうしてそんなに育ちすぎたのだろう。「ほうずき」なんていうもののようにでもあればいいのに、だけどやはり、「夕顔」という名前だけはおもしろい、と記しているように、特に花の色や形に興味を覚えたわけではなくて、朝顔と似た名の面白さからあげたものと考えられる。(F)の薄については、草の花に薄を入れないのはどうしてか、と人々は(私を)とても変な人のように思うであろうといひ<sup>6)</sup>、作者は薄を秋の野らしい風景の面白さをもたらしものとして第一のものだと考えるの

4) 後世のものであるが『書言字考節用集』に「雁來紅ガンライカウ、カマツカノハナ、一名老少年、時珍云、其ノ葉ハ九月ニ鮮紅ナリ。之ヲ望メバ花ノ如シ。故ニ名ツク。又一種、六月ニ葉ノ紅ナルハ、十様錦ト名ツクト云々」と見える。これはハケイトウである。(増田繁夫『枕草子』和泉書院一九九五年、補注一四〇・二六八～二六九ページ参照)

5) 「かにひの花」には、能因本「かるひの花」、界本「かむひの花」の本文異同がある。能因本の「る(字母留)」は「に(字母爾)」の字形相似による轉化本文であり、界本と三卷本とのちがいはm音とn音との相通によるものである。石竹科の剪春羅は五～六月頃、黄赤色の花を開き、剪秋羅は七～八月頃、深紅や白色の花を開く。しかし、これは「藤の花といとよく似て」の記述に相異なる。<sup>せんとうりや</sup>沈丁花科に同名のカンビがあるが、これは初夏に黄色の小花を開くので色彩の点で妥當しない。同じ沈丁花科のフジモドキは、樹形・葉・花房ともにカンビに類して、状の花は藤に近く、花の色も紫色である点、カンビよりも一層妥當性が強い。ただ、花期は春四月であるが、秋季にも返り咲きすることが考えられるので、「春秋と咲く」と言っても、必ずしも不當ではないと思われる。要するに、清少納言はまずガンビという名によって、セキチク科の春に咲く剪春羅と秋に咲く剪秋羅から「春秋と咲く」という觀念が構成され、ジンチョウゲ科の同名のガンビからフジモドキを連想して、次いでその藤の花に似た紫色の小花を隨想することになったものかと思われる。(萩谷朴『枕草子解環(二)』同朋舎(一九八二年)八五～八六ページ参照。)

6) 薄(はなすすきを含む)は、万葉集に一八首・古今集に九首・後撰集に九首・拾遺集に六首詠まれている。

だが、他の花の枯れた後、あまりにも長い間残っている薄の姿が未練がましい人間のようで、気に入らないといっている。しかし、作者は「色々に亂れ咲きたりし花の、かたちもなく散りたるに、冬の末まで、かしのいと白くおほどれたるも知らず、昔思ひ出で顔に、風になびきてかひろき立てる」というふうに、穂先の鮮やかな蘇枋色の美しさが真っ白く変わるまで、薄の移り変わる姿に注意している。

これらの花についての記事で、作者が特に注目していると考えられる点が二つある。一つは、あげている花の色に注目している点で、もう一つは、程度の差はあるけれども、それぞれの花について、花はもちろん、枝や葉のかたちまでを詳しく観察して書いている点である。つまり、作者は「草の花は」の段を記すについて、花や枝の形や色などに注意して、自分の好みの花を選んだのであろう。以上の枕草子の「草の花は」の段の花のとりあげ方の特徴をもとに、枕草子の萩の記述の仕方の特徴について考えてみたい。

「草の花は」の段にあげている(D)の萩は、その前にあげた龍胆以下五種の花と同様に、萩の花の色や枝の形などに注目しながら記している。萩の花は、濃い紅紫色の花が、枝もたわわになるほどに多くの花をつけて咲いているのが、朝露にぬれて、なよなよと廣がり伏しているのが素晴らしい、というふうに、まず花の色をあげついで、その花のたくさんついたさまや露に濡れた姿を記し、その次に枝の様子を記している。これはすでに述べた他の花の記述の仕方と共通するものである。しかし、それにつづく「さ牡鹿のわきて立ちならすらんも、心ことなり」の記述は、他の花の記述とは少し違うところがある。それまでの龍胆・かまつかの花・かにひの花・夕顔・薄などに關する記事は、作者が直接自分の目で見た花の色、または花や枝の形などを記したものである。けれども、傍線の「鹿が特に好んで立ち寄るとされているのも、やはり特別な感じがする」というのは、作者が実際に自分の目で見ていない事柄を記したものである。これは、次にあげる歌のように万葉以來詠まれつづけてきた、牡鹿が萩を戀人と思って訪れるという、萩についての和歌の伝統的な詠み方についての知識を記したものである。

- a 我が岡にさ牡鹿來鳴く初萩の花妻どひに來鳴くさ牡鹿（万葉集・一五四五・太宰帥大伴卿）
- b 秋萩の咲きたる野辺のさ牡鹿は散らまく惜しみ鳴き行くものを  
(万葉集・二一五九・詠み人知らず)
- c 秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えず音のさやけさ  
(古今集・二一七・詠み人知らず)
- d 秋萩の花咲きにけり高砂のをのへの鹿は今や鳴くらむ（古今集・二一八・藤原敏行朝臣）
- e さ牡鹿の立ちならす小野の秋萩に置ける白露我も消ぬべし（後撰集・三〇六・貫之）

また、「萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよなよとひろごり伏したる」の、「朝露に濡れて」というのも、次に挙げるように万葉集以來多くの歌に詠まれた、萩

と露の取り合わせによるものである。

- a 朝戸開けて物思ふ時に白露の置ける秋萩見えつつもとな (萬葉集・一五八三・あやのいみきうまかひ文忌寸馬養)
- b 我が背子がかざしの萩に置く露をさやかに見よと月は照らし  
(万葉集・二二二九・詠み人知らず)
- c 鳴きわたる雁の涙や落ちつらむもの思ふやどの萩の上の露 (古今集・二二一・詠み人知らず)
- d 秋萩の枝もとををになり行くは白露重く置けばなりけり (後撰集・三〇四・詠み人知らず)
- e うつろはむ事だに惜しき秋萩を折れぬばかりも置ける露かな (拾遺集・一八三・伊勢)

以上の、枕草子の「草の花は」の段の、萩に露と鹿を配した記事は、伝統的和歌に詠まれた萩のとりあげ方である。しかし、一見萩の和歌的な情趣をそのまま受け継いでいるように見えるこの記事には、他の花や木などについての記事に見える、和歌とは異なった自然観照の特徴も認められる。

### 3. 対象の色彩にまず注意すること

枕草子の記す萩は、それぞれの和歌に詠まれてきた伝統的な萩とは異なる、次の二つの特徴を持っている。その一つは、「萩、いと色深う」と萩の花の色を真っ先に挙げているように、萩の花の色に注目している点である。物の色に關心の深いのは枕草子の一般的な特徴である。萩の花は白あるいは紅紫色の花であるが、「いと色深う」とあって作者の考えている萩は白い花ではなく、紅紫色であるかと考えられる。このように、萩について花の色を真っ先に言うのは、ここ以外にも「木の花は」の段で櫻や、橘の色を細かく記したのと同じである。それまでの萩の和歌では、

- a 秋萩も色づきぬればきりぎりす我が寝ぬごとや夜はかなしき  
(古今集・一九八・詠み人知らず)
- b 秋萩を色どる風の吹きぬれば人の心もうたがはれけり (後撰集・二二三・詠み人知らず)
- c 秋萩の色づく秋を徒いとづらにあまたかぞへて老いぞしにける (後撰集・三〇一・貫之)

などのように「色づく」「色どる」という表現はあるけれども、特に萩の花の色そのものを詠んだ歌はない。

枕草子の萩の記事は「草の花は」の段の他にも四例あるが、そのほとんどが露の置いた早朝の萩の姿に集中している。枕草子の萩の記事四例をあげると次のようである。

(1)朝顔の露落ちぬさきに文書かむと、道のほどの心もとなく、「麻生おふの下草」など口ずさみつつ、わが方あつにいくに、格子のあがりたれば、御簾あつのそばをいささか引き上げて見るに、起きて去ぬらん人もをかしう、露もあはれなるにや、しばし端あつに立てれば、枕上あつの方に、朴に紫の紙張りたる扇、ひろがりながらある。(中略)「こよなき名残の御朝寝かな」とて、簾あつの内に半ら入りたれば、「露よりさきなる人のもどかしさに」と言ふ。(中略)出でぬる人も、いつのほどにかと見えて、萩あつの露ながら押し折りたるに付けてあれど、えさし出でず。

(第三三段、「七月ばかり、いみじう暑ければ」)

(2)面白き萩、薄などを植ゑて、見るほどに、長櫃持たる者、鋤などひき下げて、ただ掘りに掘りて去ぬるこそ、わびしうねたけれ。よろしき人などのある時はさもせぬものを、いみじう制すれど、「ただ少し」などうち言ひて去ぬる、いふかひなくねたし。(第九一段、「ねたきもの」)

(3)少し日たけぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへあがりたるも、いみじうをかし、といひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。

(第一二六段、「九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の」)

(4)野分のまたの日こそ、いみじうあはれに、をかしけれ。立藪たてとく、透垣すいがいなどの亂れたるに、前栽ども、いと心苦しげなり。大きな木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩、女郎花などの上に横ろばひ伏せる、いと思はずなり。(第一九一段、「野分のまたの日こそ」)

このうち(2)は、自分の庭に植えて楽しんでいた萩を、身分の高い人の召使が来て、勝手に掘って持って行く時の腹立たしさを記したもので、時間と関わらずに記した萩として例外的である。(1)と(3)は、傍線の「萩の露ながら押し折りたる」「少し日たけぬれば、萩などいと重げなるに、露の落つるに」など、まだ露の消えていないうちの早朝の萩のことを書いている。(4)の記事は、はっきり早朝とは書いていないが、強風の吹いた次の日に荒れている庭の手入れが済む前の様子を記しているため、他の人がまだ起きて働く前の早い時間であろう。和歌に詠まれる萩は、次のように夕方や夜あるいは朝の露の置く時間の萩をとりあげている。

a 我がやどの秋の萩咲く夕影たつゆかげに今も見てしか妹が姿を (万葉集・一六二六・大伴田村大嬢)

b 我が背子がかざしの萩に置く露をさやかに見よと月つきは照るらし

(万葉集・二二二九・詠み人知らず)

c すぎる鳴く秋の萩原朝立あさたちちて旅ゆく人をいつとか待たむ (古今集・三六六・詠み人知らず)

d 幾世へて後か忘れん散りぬべき野辺の秋萩みがく月夜つきよを (後撰集・三一七・深養父)

e 起き明かし見つつ眺むる萩の上の露ふきみだる秋の夜の風 (後拾遺集・二九五・伊勢大輔)

ところが枕草子では早朝の萩だけをとりあげている。これは、他の木や花などの記事にうかがわれる作者の鋭い色彩感覚と深く関係があるのであろう。物の色は、日光の状態によって一日

のうちで少しづつ色が変わって見える。満月に照らされていても物の色ははっきりしないで、私たちの目には明暗が捉えられるにすぎない<sup>7)</sup>。第三〇四段「日影に劣るもの」の段では、「日影に劣るもの。紫の織物。藤の花。すべてその類はみな劣る。紅は月夜にぞわろき」と、光の多すぎる眞晝の日光の中や光の乏しい月光の中では、物の色彩本来の美しさが衰えて見えることを記している。作者は強い日光のもとで物の美しさが劣るものに紫のものを挙げ、ついで夜になって月光の下で見ると、色が衰えて見えるものには紅色のものを挙げている。つまり紅色と紫色が混ざっている萩の花は、日差しが強いところでは十分に美しさが発揮されない。また、夜になると萩の紅紫色の花がうすれてよく見えなくなってしまう。つまり、紅紫色の萩の花が美しく見えるのは、日差しが強くならないうち、そしてまだ暗くならない間ということになる。枕草子の萩の記事には、伝統的な和歌に詠まれる萩と露、萩と鹿の取り合わせを受け継いでいるとともに、それだけではなく、萩の花の色に注意した、色彩に敏感な作者の感覚が働いているのである。

もっとも、枕草子の萩に關係する記事には、紅紫の萩のことだと認められる記事はあっても、白い萩の花の記事がまったくない。一般に枕草子には、白い色の好きな作者の好みがよく表れた記事が多い<sup>8)</sup>。次は、月夜に見た美しい風景を記した記事である。

月のいと明きに、川を渡れば、牛の歩むままに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそ  
をかしけれ。  
(第二一八段、「月のいと明きに」)

この記事は月のとても明るい夜に、牛車で川を渡ると、牛が歩くのにつれて、水晶などがわれたように、水が光って飛び散るのがとてもきれいだ、といて月光の美しさを見事に描いている。水晶は「あてなるもの」の段にも「水晶の數珠」と挙げられているが、月夜に見た水滴が上品で美しい水晶に喩えられるくらい、きれいに見えたのである。ほかにも、次のように月夜に見た雪景色と、その雪景色の中を車に乗ってゆく、男女の着ている色鮮やかな服装を記した記事もある。

日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷<sup>たるひ</sup>いみじうしたり。土などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上は、ただおしなべて白きに、あやしき<sup>しづ</sup>賤の屋も、雪に皆面隠して、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。銀などを葺きたるやうなるに、水晶の瀧などいはまじやうにて、長く短く、ことさらにかけ渡したると見えて、いふにも余りてめでたきに、下簾だれも懸けぬ車の、簾だれをいと高う上げたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、白き、紅梅など、七つ八つばかり着たる上に、濃き衣の、いとあざやかなるつやなど、月に映えてをかしう見ゆる傍に、葡萄染の固文の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣の

7) 櫻井那朋『自然の中の光と色』中央公論社 一九九一年、十二ページ参照。

8) 第三九段「あてなるもの」の段、第五七段「よき家の中門あけて」の段、第一四六段「うつくしきもの」の段、第一八四段「好き好きしくて」の段、第二六八段「單衣は」の段など参照。

いと白き、紐を解きたれば、脱ぎ垂れられて、いみじうこぼれ出でたり。指貫の片つ方は、軾のもとに踏み出だしたるなど、道に人會ひたらば、<sup>〽</sup>をかしと見つべし。月の影のはしたなさに、後さまにすべり入るを、常に引き寄せ、あらはになされて、わぶるもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふことを、返す返す誦じておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるも、<sup>〽</sup>くち惜し。(第二八七段、「十二月二十四日、宮の御仏名の」)

何日も降り続いた雪がやんで、風などが強く吹いたので、つららが一面に下がっている。地面などは、まだらに白い所が多いといった程度だが、<sup>〽</sup>屋根は一面に眞白なので、みすばらしい家も、雪ですっかりそのあやしさを隠して、<sup>〽</sup>有明の月がくまなく照らしているので、とても趣のある中を、下簾もかけない車が、<sup>〽</sup>簾を高々と巻き上げているので、車の奥まで射し込んでいる月の光に、薄紫、白、<sup>〽</sup>紅梅など、七、八枚ほど重ねて着た上に、濃い色の表着のたいそう鮮やかな光澤などが、<sup>〽</sup>月光に映えて美しく見える女と、葡萄染めの固紋の指貫に、白い単衣をたくさん重ね、<sup>〽</sup>山吹や紅色の衣などを、外にこぼれて見えるように着た男が牛車に乗っていく。月の光が明るくて、<sup>〽</sup>きまり悪いので女が車の後のほうへ引っ込むのを、男は始終そばに引き寄せ、<sup>〽</sup>人目につくようにされては、女がつらがるのもおもしろい。「凜々として氷鋪けり」<sup>9)</sup>という詩を、<sup>〽</sup>繰り返し男が吟誦していらっしやるのは、とても風情があって、一晩中でもこうして車に乗ってまわりたいのに、<sup>〽</sup>目的のところが近くなるのも、残念なことだ、という記事である。

これは、作者の鋭い色彩感覚が見事に發揮された美しい光景描寫である。しかし、いくら明るい月夜で雪明かりがあるとは言え、車の中の男女の服装がこれほどに詳しく見えるかという疑問もある。この記事は、男の吟誦する様子を「誦じておはする」と表現している点から、かつての作者の経験をまじえて書いたのだとする説もある<sup>10)</sup>。美しい月夜の雪景色を作者の経験をもとに想像した記事かも知れない。ここで注目したいのは、雪に覆われた夜の景色を含め、男女の着ている服装の白・紅梅・葡萄染め・山吹・紅色・赤(あるいは紫)などの多様な色が鮮やかに記されている点である。特に、この記事には雪景色を含め、男の単衣や直衣など「白」が多く挙げられている。前に挙げた、牛の歩くにつれて跳ね上がる水滴を記した記事も、跳ね上がる水滴を透明で白い水晶に喩えているので、二つの記事は月光に照らされて白く光るものという点で似ている。作者は白い色のものが好きだということは既に述べたが、この二つの記事

9) 「<sup>しんでん</sup>秦甸の一千余里凜々として氷鋪けり漢家の三十六宮澄々として<sup>ふんかぎ</sup>粉飾れり」[都の周囲は一千余里の外まで氷をしきつめたように冴え渡り、漢の三十六の宮殿は白粉を塗って飾ったように澄み渡っている] (大曾根章介・堀内秀晃 校注・新潮日本古典集成『和漢朗詠集』[上・十五夜・二四〇] 昭和五八年)  
10) 牛車に同車している男女の姿を客観的に描寫しているといった体裁をとっていながら、その末尾の部分には男に對して「誦じておはするは」と敬語を用いている。この点作者の位置が不明確であり、作者の体験が混じってしまっているかとも思われる。(上坂信男外校注『枕草子(下)』講談社(二〇〇三年)神作光一、二四八ページ参照)

にも、作者の白いものへの強い関心がよく表われている。こういうふうには、色彩に敏感で白いものの好きな作者が、萩の記事に白い花の咲く萩について書いていないのは何故なのか。小さい萩の花の白さは、はっきりした色を好む作者の注意を惹くほど、十分に目立たなかったであろう。

以上の月夜の記事を通してもう一度確認したいのは、作者が自分の目にするものの色、たいへん細かく注意して見ている点である。このような色彩に敏感な作者の性格から、萩の花の美しさがよく観賞できる時間帯の、光のさす間の萩をとりあげて記すようにしたのであると考えられる。

#### 4. 視覚を中心に行っていること

和歌に詠まれた萩と、枕草子の萩のとりあげ方の違いの第二は、枕草子が「枝たをやかに咲きたる」「なよなよとひろごり伏したる」というように、花がたくさんついて枝もたわむになっている様子や、萩の枝が横にやわらかく伸び広がっているさまなど、萩の枝の有様に注目している点である。和歌では、

- a 秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出でめやも  
(万葉集・一五九九・大伴宿禰<sup>おほとものすくね</sup>像見)
- b 秋萩の枝もとををになり行くは白露重く置けばなりけり (後撰集・三〇四・詠み人知らず)
- c 置く露にたわむ枝だにあるものをいかでかをらんやどの秋萩 (後拾遺集・三〇一・橘則長)

などのように、萩の枝がたわむほどに枝いっぱいには置いた露を詠んだ歌があり、その中にはたくさんの露で枝のたわむ様子を詠んだ歌はあるが、枝のたわむほどの多くの花のついた萩をとりあげた歌は見えない。上に挙げたcの歌は、清少納言の息子である橘則長の詠んだ歌である。枕草子の萩の記事の、花のたくさんついた萩の枝のたわむ様子を、そのまま受け継いでいる歌とは言えないが、枝のたわむ様子に注目している点で、枕草子に通じる歌の詠み方であると言えよう。

また、「なよなよとひろごり伏したる」と、萩の枝が横にしなやかに伸び広がっている様子を詠んだ歌も、枕草子より前に詠まれた歌の中では探せない。枕草子より少し後れて詠まれた歌で、萩のうち伏す状態を「寝る」と見立てた歌が、後拾遺集に二首収録されているくらいである<sup>11)</sup>。

11)\*新左衛門：生没年未詳。童名は良宇太。散位従五位下中原経相の女。後朱雀院の梅壺女御御生子につかえ、後に頼通家女房になった。\*中納言女王：生没年未詳。小一條院女。中納言藤原通任の猶子となり中納言と号した(以上陽明文庫藏伝爲家卿筆本勅物)。また、金葉集・千載集に「中納言女王」の作とし

萩の寝たるに露の置きたるを、人々よみはべりけるによめる

- a まだ宵に寝たる萩かな同じ枝にやがておきめる露もこそあれ（後拾遺集・二九七・新左衛門）  
おなじ心をよみはべりける
- b 人知れずものをや思ふ秋萩の寝たるかほにて露ぞこぼる（後拾遺集・二九八・中納言女王）

しかし、この二首の歌も、萩を鹿の配偶者と見立てた連想から「寝る」と詠んだので、萩の枝そのものを「ねる」と詠んだ歌ではない。このように、枕草子が和歌の注意していなかった、たくさんの花のついた萩の枝の有様、または横に伸び広がっている枝の形などを細かく描寫しているのは、対象の色彩にまず注意する性格とともに、目に見える対象の姿形の一つ一つまでを細かく観察する作者の自然観照の特徴だといえよう。

以上の萩の花や枝の様子を細かく観察した作者の視線は、露の落ちるとともに上様に跳ね上がる、萩の枝の一瞬の動きまでも見逃すことがなく、次のように記している。

九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけぎやかにさし出でたるに、前栽の露は、こぼるばかり濡れかかりたるも、いとをかし。透垣<sup>すいかき</sup>の羅文<sup>らもん</sup>、軒の上などは、かいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

少し日たけぬれば、萩などのいと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上ごまへあがりたるも、いみじうをかし、といひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。（第一二六段、「九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の」）

九月頃、一晩中降り續けた雨が、朝にはやんで、朝日がとても鮮やかに射しはじめたなか、前栽に置いた露は、こぼれんばかりに草木に濡れかかっているのも、とても風情がある。透垣の羅文や軒先にかいてある蜘蛛の巢の破れ残ったものに、雨がかかったのが、白い玉を貫いたようであるのは、とてもしみじみとした味わいと美しさがある。少し日が高くなると、萩などの草木がたいへん重そうにしまれているのに、露が滑り落ちると枝が動いて、人が何も手を触れないのに、ふっと上に跳ね上がっているのもたいへん心惹かれる、と私が知っていることなどが、他の人の心には少しも興を起こさせないだろうと思うと、また面白い、というのである。作者はまず雨の上がった後に見える庭の全景を描寫している。雨上がりの庭の景色を見回っていた作者は、透垣や軒下などにある蜘蛛の巢に溢れんばかりに多く置いた露が、朝日に光っている光景に心を惹かれ美しく思い、さらに、露の落ちた瞬間に跳ね上がる萩の枝の一瞬の動きに

---

て入集する歌が、嘉保元年(一〇九四)八月十九日前關白師實歌合・長治元年(一一〇四)五月廿六日左近衛權中將俊忠歌合において「中納言君」「殿の中納言の典侍」の詠とされていることから、これらを同一人物と考えると、源頼綱に嫁し仲正(政とも)を儲け、關白師實室麗子の女房になったことが知られる。(犬養廉他『後拾遺和歌集新釋上』笠間書院(一九九七年)三一・三六五ページ参照)

も目が止まったのであろう。庭には萩の他にも色々の草木が植えられていたはずなのに、特に萩をとりあげたのは、萩の枝の一瞬の動きが強く作者の心を惹いたからだと考えられる。作者は、自分の注意した萩の枝の動きが、他の人にはあまり興味がないだろうと知っていて、誰も面白がらないそんな萩の枝の動きに、自分だけが楽しんでいることが嬉しかったのである。

しかし、このように他の人があまり注意しないような、萩の枝の小さな動きまでをとりあげて記した枕草子だが、次の歌に詠まれたようなもみじする萩、散る萩についてはとりあげていない。

- a 秋風は日に異に吹きぬ高円の野辺の秋萩散らまく惜しも  
(万葉集・二一二五・詠み人知らず)
- b 夜を寒みころもかりがね鳴くなへに萩の下葉もうつろひにけり  
(古今集・二一一・詠み人知らず)
- c 吹きまよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の  
(古今集・七八一・雲林院親王)
- d 秋萩を色どる風は吹きぬとも心はかれじ草葉ならねば  
(後撰集・二二四・在原業平)

勿論、枕草子は和歌ではないので、和歌に取り上げられた萩のすべてを同じように取り上げる必要はない。しかし、早朝の萩の様子を集中的に記すことによって、美しい盛りの萩の様子を描こうとする作者は、意識的であれ無意識的であれ萩の花の散る姿や、もみじする葉についての記述を避けたかったのではないだろうか。萩の枯れていく姿の描寫がないのは、枕草子に散る櫻の記事のないのと同様である。枕草子には散る櫻を惜しむ記事はないが、咲いている櫻については花びらの大きさや葉の色、枝の様子などにいたるまで細かく記している<sup>12)</sup>。作者は散る花や物事の衰えた姿をとりあげたくなかったというよりは、咲いている美しい花の姿を取りあげたかったのであると考えられる。

## 5. おわりに

以上、枕草子にとりあげられた萩の描寫と、和歌に詠まれた萩の詠み方との共通性と違いを通して、枕草子の萩の描寫の特徴について考えた。枕草子の萩の記事は、和歌の詠み方を大きく離れることはなく、伝統的な和歌的情趣を基本に記している。しかし、そうした和歌的情趣を受け継ぎながらも、和歌とはまた違う、枕草子の独特な自然観照の態度も認められる。その特徴は大きく二つが考えられる。その一つは、「萩、いと色深う」と歌にはあまり詠まれていな

12) 拙論「枕草子に描かれた花—櫻を中心に」『かほよとり』第一二号 武庫川女子大学大学院文学研究科国語国文学専攻院生研究会(二〇〇四年十一月)参照。

い、萩の花の色に注目している点である。色に注目するのは梅の記事に表れる特徴とも似たもので、多くの和歌が梅の香を讃えているなかで、枕草子は始終梅の色に注目したことに通じる<sup>13)</sup>。作者の鋭い色彩感覚は、日差しや月光の下では紅紫色で咲く萩の花の色が衰えて見える特性に注意し、萩の花の色がもっとも美しく見える時間帯の、露の置いた早朝の萩を集中的に記しているところによく表れている。

二つ目は、「枝たをやかに咲きたる」「なよなよとひろごり伏したる」というような、萩の花だけではなく、その枝の様子や枝の廣がりさまなどを詳しく記していることである。これは、目で見るものの色や姿形の細部まで、一つ一つを細かく注意した作者の自然観照の特徴である。また、枕草子には散る萩の様子やもみじする萩の葉のことが記されていない。萩の花の散ることや色の移り、葉の色が変わることを取りあげた歌が多いとは対照的である。作者に枯れていく萩を惜しむ気持ちがなかったというよりは、咲いている萩、盛りの美しい萩の姿により強く興味を持っていたと考えられる。以上の、萩の記事を通して考えられる枕草子の自然観照の特徴は、枕草子がかもっぱら視覚によって物事を認識して書かれた作品であり、伝統的な和歌の詠み方に加えて、自分なりの新しい美の世界を見つけようとしたことにある。

## 【参考文献】

- 犬養廉他(1997年)『後拾遺和歌集新釋(上)』笠間書院、312～365ページ
- 上坂信男外校注(2003年)『枕草子(下)』講談社、248ページ
- 大曾根章介・堀内秀晃校注(1983年) 新潮日本古典集成『和漢朗詠集』新潮社
- 大曾根章介・久保田淳(2000年)『鴨長明全集』貴重本刊行會、105ページ
- 櫻井那朋(1991年)『自然の中の光と色』中央公論社
- 萩谷朴(1982年)『枕草子解環(二)』同朋舎、85～86ページ
- 増田繁夫(1995年)『枕草子』和泉書院
- 拙論『かほよとり』第一二號(2004年4月)武庫川女子大學大學院文學研究科國語國文學専攻院生研究會

---

13) 2004年度 武庫川國文學會研究發表「枕草子に描かれた花—梅を中心に」、『武庫川國文』第一六号(二〇〇五年一月掲載予定)

## 要 旨

萩は秋の七草の一つで、しだれた枝に白や紅紫色の數多の小花をつける植物で、古代には染料にも用いられたので人々に親しまれていた。萩は万葉集に詠まれている花の中で最も數が多く一四一首詠まれているし、平安時代に入っても秋の代表的な景物として和歌に詠まれつづけてきた植物である。和歌では萩は鹿・雁などの動物や、露・月・秋風などの天象とともに詠まれることが多い。萩は歌に詠まれるだけではなく、人々は自分の家の庭に萩を植えて楽しむこともした。このように人々に愛された萩を、枕草子はどのように描いているのか。

枕草子の萩の記事は和歌の詠み方を大きく離れることはなく、伝統的な和歌的情趣を基本に記している。しかし、そうした和歌的情趣を受け継ぎながらも、和歌とはまた違う枕草子の獨特な自然觀照の態度も認められる。その特徴は大きく二つが考えられる。その一つは、歌にはあまり詠まれていない萩の花の色に注目している点である。色に注目するのは梅の記事に表れる特徴とも似たもので、多くの和歌が梅の香を讃えているなかで、枕草子は始終梅の色に注目したことに通じる。二つ目は、萩の花だけではなく、その枝の様子や枝の廣がりさまなどを詳しく記していることである。これは、目で見るものの色や姿形の細部まで、一つ一つを細かく注意した作者の自然觀照の特徴である。また、枕草子には散る萩の様子や、もみじする萩の葉のことが記されていない。和歌には萩の花の散ることや色の移り、葉の色が変わることをとりあげた歌が多いのとは對照的である。以上の萩の記事を通して考えられる枕草子の自然觀照の特徴は、枕草子がかもっぱら視覺によって物事を認識して書かれた作品であり、伝統的な和歌の詠み方に加えて、自分なりの新しい美の世界を見つけようとしたことにある。

キーワード：萩・露・朝露・牡鹿・色・月・枝

투 고 : 2005. 8. 31  
1차 심사 : 2005. 9. 10  
2차 심사 : 2005. 10. 1

住 所 : (663-8181) 兵庫縣西宮市若草町2丁目8-23-302  
電 話 : 090-3704-5498  
e-mail : satobito@hanmail.net(韓國語) / chjool12@yahoo.co.jp(日本語)